

だから百科事典はやめられない

もしま すけたか
百島 祐貴

(慶應義塾大学病院予防医療センター副センター長)

百科事典が大好きだった。子供の頃、図書館にずらりと並ぶ背表紙を前にすると、これを読めば世の中のことが全て分かる……という期待(=錯覚)を抱かせてくれたものである。塾高1年の時、平凡社大百科事典(全35巻)をねだって買ってもらい、それからしばらくは毎日のように読んでいて、「百科事典ばかり見てないで少しは勉強しなさい」(!?)と言われた。

この時、オマケとしてついてきた「百科事典操縦法」という小冊子が手元に残っている。百科事典の仕組みや効率的な使い方を書いたハウツー本だが、特に百科事典を活用するために索引を上手に使うことの重要性が詳述されており、索引を駆使して芋づる式に知識を増やす術を憶えたことはその後の勉強に随分役だった。今思うと、これが最初に経験した情報リテラシー教育だったかも知れない。また「慢性百科事典中毒」になるくらい親しむことが大切とも書いてあるのだが、言われなくてもそれに近い状態だった。奥付には1973年刊となっており、あらためてみると著者は梅棹忠夫、加藤秀俊、小松左京という錚々たる顔ぶれである。

ところで、この冊子の後半に「百科事典の改造と未来」という章があり、百科事典を50音別にバラして、キーボードを押すと電磁石の仕組みでその部分だけが取り出しやすいようにピョコッと飛び出してくる、という日曜大工のイラストが出ていて、回路図まで載っている。今からすると笑ってしまうようなアイデアだが、当時としてはそれなりに現実味があったのだろう。

しかしさすがにこの著者だけあってそれだけでは終わらず、その後には、音声データ、画像データを利用した百科事典、膨大な百科情報を蓄えた中央のコンピュータに家庭の端末を接続する方法、さらには知識を社会全体に蓄えてこれを縦横に検索するシステムへの夢が語られている。これはまさに現在のオンラインデータベース、さらにはウェブシステムを予言したもので、その炯眼、先見性には驚くばかりで

ある。

この百科事典はとことん使い倒した。その後はDVD版、オンライン版も使ったが、紙媒体の平凡社大百科事典は現在も販売されているものの、2007年を最後に改訂されておらず、その役目を終えたようだ。さらに言えば、百科事典といえばやはり金字塔の Encyclopædia Britannica である。いずれはゼツタイに買うぞと思っていたのだが、いかんせん置き場所がないので躊躇しているうちに、これも2010年に印刷体は更新を終えてその後まもなく在庫終了、新品の入手は不可能となってしまった。

調べものといえどとりあえずウェブ検索から入る現在、あえて百科事典を意識することはなくなってしまった。百科事典という言葉そのものが、そのうち過去のものとなってしまふのかもしれない。万人が編集に参加できる Wikipedia は確かに素晴らしいアイデアだし、専門家が独占する知識の普遍化、公開が、民主平等の根幹を成すことは歴史の教えるところでもある。

しかし、ウェブ上に散在する知識の精度は、専門家の編纂になる百科事典に比べて遥に劣る。これがどの程度のものかは、自分が熟知している専門分野を検索してみればすぐわかることで、仰天するような記載がまかり通っていることも稀ではない。とは言え、やろうと思えば誰もがそれを訂正できることはウェブ情報の優れたところだし、専門外の分野については、無いよりはずっとマシというわけで思わず検索してしまうが、検索結果の信頼度を判断できないことも多い。情報リテラシーの教育では、情報の検索方法に加えて、得られた知識の較正技術を学ぶことも、同じくらい重要であろう。

実はこの40年前に買った百科事典、実家にまだそのまま置いてある。たまに帰省すると思わず読み耽ってしまい、今は一人暮らしの母に「百科事典ばかり見てないで少しは手伝いでもしなさい」とまた言われてしまうのである。